

富山県上市町

黒川上山古墓群発掘調査第6次調査概報

日枝神社裏遺跡 円念寺山遺跡

2001年3月

上市町教育委員会

『黒川上山古墓群発掘調査第6次調査概報 日枝神社裏遺跡 円念寺山遺跡』正誤表

頁・項目	行	誤	正
「序」	12-13	発見されました	発見されました
〃	19-20	富山県文化財課	富山県教育委員会文化財課
「例言」	7	文化課	文化財課
〃	18	舟崎久夫	舟崎久雄
〃	〃	岸本雅俊	岸本雅敏
1	4	西側は標高2,998mの	東側は標高2,998mの
〃	6	郷川の左岸	郷川の右岸
「第1図」	縮尺	1/500,000	1/50,000
「第2図」	縮尺	1/500,000	1/5,000
6	7	集積2	集石2
〃	12	黄褐色砂質土	明黄褐色砂質土
10	2	短刀・刀	短刀・刀子
12	2	変えたい	代えたい
「第6図」	縮尺	1/5000	1/200

お手数をおかけしますが、上記事項の変更を宜しくお願ひ致します。

上市町教育委員会

富山県上市町

黒川上山古墓群発掘調査第6次調査概報

日枝神社裏遺跡 円念寺山遺跡

2001年3月

上市町教育委員会

序

上市町では、平成6年に下水道管理用道路敷設に伴う発掘調査で、12世紀末から14世紀までの中世墳丘墓群を調査しました。この遺跡は黒川上山古墓群であり、完全な形で今に残る全国でもまれな遺跡であることが判明しました。町ではその重要性から道路の方線変更を行い、全面的に遺跡を保存し、同年12月には上市町指定史跡として後世に残すことになりました。

上市町教育委員会ではこの遺跡を次代に残すため保存整備をする予定ですが、その資料作成のための発掘調査を平成8年度より国庫補助を得て計画的に行っております。

前回調査まで、12世紀後半から15世紀に及ぶ墳丘墓67基、黒川上山古墓群の東側に古墓群よりやや古いと思われる6基の墳丘墓、石垣造構、平坦面、石列、礎石跡が確認されました。伝承、真興寺跡の比定地からは、本堂跡、塔跡、堂跡と思われる基壇、礎石などが確認されました。また池跡と思われる窪み、湧水地、盛土、大きな窪みのある平坦面が発見されました。

今回の調査では、日枝神社裏さらに分布調査では、周辺の山林に大小様々な平坦面が確認されました。一帯が、黒川上山古墓群・黒川塚跡東遺跡・真興寺跡を含めた一大靈場であったことが示されました。

調査は、平成12年10月から平成13年3月にかけて実施しましたが、この間に掘り出された資料が上市町及び富山県の歴史を物語るようがとなれば幸いです。

最後になりましたが、調査にあたり多大なご指導をいただきました文化庁記念物課、富山県文化財課、富山県埋蔵文化財センター、富山考古学会、黒川地区のみなさまに心より感謝申し上げます。

平成13年3月

上市町教育委員会

例　　言

1. 本書は富山県中中新川郡上市町黒川地内に所在する日枝神社遺跡・円念寺山遺跡の第6次発掘調査報告書である。
2. 調査は、平成12年6月12日から平成13年3月31日まで延べ56日間で実施した。分布調査は、富山大学人文学部考古学研究室の協力を得て、平成12年10月28日から11月12日までの2日間で行った。
3. 調査面積は2500m²である。
4. 調査は、国庫補助金、県補助金を得て上市町教育委員会が実施した。
5. 調査事務局は上市町教育委員会にあり、調査期間中、文化庁記念物課、富山県教育委員会（文化課・県埋蔵文化財センター）の指導を受けた。事務及び調査担当は、生涯学習課文化振興係係長高慶孝・同嘱託廣瀬直樹が担当し、生涯学習課長牧野茂雄が総括した。
6. 遺物の整理、本書の編集・執筆は調査担当者が行ったが、遺物の実測・トレースは調査担当が中心となり、後述する整理作業員が行った。
7. 調査期間中、富山考古学会 西井龍儀氏、富山市埋蔵文化財センター所長 藤田富士夫氏、富山県教育委員会文化財課主任安念幹倫、同 池田典子、富山県埋蔵文化財センター副主幹・調査課長 宮田進一氏、同副主幹 斎藤隆、同主任橋本正春の各氏の視察を受け、ご指導をいただいた。また京都国立博物館学芸課主任研究官久保智康氏には、金属製品についてご指導をいただいた。
- その他調査期間中及び本書の作成にあたり、下記の方々から有意義なご指導・助言並びにご協力を頂いた。記して深甚なる謝意としたい。
- 文化庁文化財調査官 板井秀弥、舟崎久夫、富山県埋蔵文化財センター所長 岸本雅俊、立山町教育委員会社会教育課主任 三鍋秀典、同嘱託田中幸生・渡辺 樹、黒川区長 伊藤勝保、山加積公民館館長 井原政昭（順不同・敬称略）
8. 調査参加者はつぎのとおりである。
砂田普司（以上富山大学大学院）猪狩俊哉、小栗由希代、澤野慶子、新宅由紀、萬川貴祥、松澤那々子、山下 研、山本教幸（以上富山大学学生）荒木智恵子、石井勝代、伊藤恭子、大沢邦子、大沢富子、鹿熊和雄、金子みつみ、神谷トシ子、川上富美子、酒井栄子、酒井文子、甚内みき子、高城英子、高城富美子、高城榮子、竹林昭夫、中川セツ、中川美里子、西川文一、早崎秋子、松本ミツ子、安村ミツ子（以上作業員）甚内みき子（以上整理作業員）（分布調査参加者）戸瀬暢宏（以上富山大学大学院）安瀬佳織、瓜生日奈子、小栗由希代、表原孝好、折田晃子、北川康介、佐藤絵理奈、澤野慶子、新宅由紀、田中俊輔、田中洋一、萬川貴祥、床平慎介、福沢佳典、松澤那々子、向島 裕、山下 研、山本教幸、遂佐真一郎、吉村 晶（以上富山大学学生）

目 次

序 文

例 言

I 遺跡の環境	1
第1図 地形と周辺の遺跡	2
II 調査に至る経過	3
III 調査の経過と層序	3
第2図 遺跡周辺図	4
IV 調査結果	5
日枝神社裏遺跡	5
1. 遺構	5
2. 遺物	7
円念寺山遺跡	8
1. 遺構	8
2. 遺物	9
3. 洞穴	11
黒川穴の谷靈場周辺の分布調査について	11
V まとめ	12
引用・参考文献	

第3図 日枝神社裏遺跡遺構全図

図版6 遺物実測図（円念寺）

第4図 日枝神社裏遺跡遺構実測図

図版7 遺構写真（日枝神社）

平坦面1、SK1

図版8 遺構写真（日枝神社）

第5図 日枝神社裏遺跡遺構実測図

図版9 遺構写真（円念寺）

石 列

図版10 遺構写真（円念寺）

第6図 円念寺山遺跡遺構全図

図版11 黒川地区周辺遺跡写真

第7図 黒川地区周辺遺跡（靈場関係）分布図

図版12 遺物写真（日枝神社）

図版

図版13 遺物写真（日枝神社）

図版1 黒川上山古墓群 周辺航空写真

図版14 遺物写真（日枝神社）

図版2 遺物実測図（日枝神社）

図版15 遺物写真（円念寺）

図版3 遺物実測図（日枝神社・円念寺）

図版16 遺物写真（円念寺）

図版4 遺物実測図（円念寺）

図版17 遺物写真（円念寺）

図版5 遺物実測図（円念寺）

図版18 遺物写真（円念寺）

I 遺跡の環境

上市町黒川日枝神社裏遺跡・円念寺山遺跡は、富山県中新川郡上市町黒川字花岡山及び舟ノ谷に所在する（第1図・第2図・図版1）。上市町は、富山県の東南部に位置し、立山連峰に源を発する早月川、上市川、白岩川に沿って東南から北西にのびる町である。西は県都富山市、北は滑川市、南は立山町に接し、西側は標高2,998mの魁岳をはじめとする北アルプスの山々が連なる。

遺跡の所在地である黒川は市街地の北東にあり、上市川の支流、郷川の左岸標高30m前後にある。西は滑川市に隣接する。

日枝神社裏遺跡は、上山古墓群の西約50mに位置し、谷を隔てた対岸標高50m前後に占地する。円念寺山遺跡は、古墓群の南約300mに位置する。通称「円念寺山」と呼ばれる尾根上標高80m前後に占地する。日枝神社裏遺跡と上山古墓群の間の谷には、名水百選の「穴の谷靈場」に向かう道路があり、両遺跡は、その入り口部分に一対で存在する。

日枝神社裏遺跡は、一昨年の分布調査で、開削された平坦面と集石列を確認した。日枝神社は、明確ではないが、室町時代のはじめから存在したと伝えられている。日枝社は修驗道と深く関わるものと考えられているが、この遺跡は、立地的にも上山古墓群と関係があるものと考えられる。

円念寺山遺跡は、昨年の分布調査で尾根上に集石と思われる高まりを確認している。

県道五位尾・上中町線に平行する尾根上でこの尾根を東に上れば、昨年調査した開谷集落に至る。開谷集落は、宗教集落として発達したといわれ、源内坊・奥野坊・作内坊・好田坊などができる信仰の中心になったと言われる。遺跡のある舟ノ谷は、円念寺山と呼ばれ、本地域の宗教上の拠点の一つといわれる。尾根上からは、黒川集落のある谷を一望でき、北に上山古墓群、西に真興寺、東に護摩堂、さらには魁岳（標高2,998m）を一望できる。平野部に目を転ずれば、滑川堀江方面（中世は、堀江荘と呼ばれる祇園社領の莊園）、遠く富山湾まで望める景勝の地である。

調査区周辺の地域には、今回の調査の一環として行った分布調査・簡易測量調査の結果数多くの平坦面を確認した。特に「穴の谷靈場」北側の平坦面は、規模も大きく10世紀前後の遺物も多く検出されることからこの地がかなり以前から何らかの目的で利用されてきたことが伺われる。

町内及び郷川・白岩川周辺の古代から中近世の遺跡としては、市街地の北東に真言宗の古刹「大岩山日石寺」がある。この寺院は北陸有数の真言寺寺院で、開基は奈良時代まで遡るといわれる。本尊は不動明王で磨崖佛として国指定文化財として指定されている。また裏山の京ヶ峰には12世紀初頭の經塚があり、經筒及び外容器が出土している。

東には、曹洞宗の眼目山立山寺（眼目山旧開山堂遺跡、鎌倉後期）や、日中玉橋經塚・日中東經塚・南北朝期から戦国時代まで中新川一帯に勢力のあった上肥氏をはじめとする豪族の城や居館跡（義輪城跡・稲村城跡・郷井沢館跡・柿沢城跡・若荷谷山城跡・郷田城跡・弓庄城跡・千石山城跡・有金城跡・堀江城跡・堀の内城跡など）、文献上古代から中世に登場する堀江保・小森保あるいは堀江荘に関連するとみられる遺跡（江上B遺跡・東江上遺跡・上梅沢町遺跡・本江馬場田遺跡・横越遺跡など）が数多くみられる。これらの遺跡をバックボーンとして本地域が成立したものとみられ、これらの遺跡との関わりの中でその消長があったものと考えたい。また、本遺跡の立地から尾根づたに立山信仰との関連も十分に考えられ、平野部の遺跡との関連・山間部の城や寺院との関連も十分視野に入れておかなければならない。密教、特に真言宗における山岳信仰のあり方を十分に考慮に入れた調査が必要であり、中新川地区全体の中世の遺跡の詳細な検討が必要である。



第1図 地形と周辺の遺跡（1/500,000）

- 1.日枝神社裏道跡, 2.円念寺山遺跡, 3.真興寺跡遺跡, 4.黒川上山古墓群,
- 5.蓑輪城跡, 6.広野D遺跡, 7.広野C遺跡, 8.眼目山旧開山堂遺跡, 9.稻村山城跡,
- 10.日寺石磨崖仏, 11.大岩京ヶ峰経塚, 12.郷柿沢館跡, 13.湯崎野西遺跡,
- 14.湯神子B遺跡, 15.柿沢城跡, 16.芭荷谷山城跡, 17.郷田砦, 18.弓庄城跡,
- 19.日中玉橋経塚, 20.日中東経塚, 21.横越遺跡, 22.若杉神田遺跡, 23.中小泉東遺跡,
- 24.石仏遺跡, 25.石仏鶴町遺跡, 26.石仏南遺跡, 27.大永田西遺跡, 28.江上B遺跡,
- 29.上梅沢町跡, 30.上梅沢遺跡, 31.有金城跡, 32.堀江城跡, 33.本江馬場田遺跡,
- 34.鉢山砦跡, 35.小森館跡, 36.堀の内城跡, 37.水尾南城跡

II 調査に至る経過

上市町黒川地内では、平成5年度に農業集落排水事業の管理用道路が計画された。しかし当該地区には上山古墓群の存在が知られており、事前の発掘調査が行われた。調査が進む中で、本遺跡が全国でも調査例の少ない中世墳丘墓で、墓数も40基を上回るきわめて良好な遺跡であることが明らかとなった。これを受け上市町教育委員会は、上級機関の指導のもと、県文化財保護審議委員浜田氏・奈良大学学長水野正好氏に現地視察をお願いし、保存に関する意見をいただいた。この意見を元に、町当局と再度協議を重ね、地元黒川地区からの保存要請もあり、全面保存の方向で合意した。その後同地内は平成6年12月8日町指定史跡として指定され、平成7年度には公有地化も図られた。平成8年度から、黒川上山古墓群の保存と一般公開のための資料収集を目的として周辺調査を行っている。

III 調査の経過と層序

第1次調査（平成6年度本調査）

平成6年5月13日から同年7月27日までの延べ72日間で実施した。調査対象は1,500m²で、このうち道路が計画された部分について遺跡の内容を確認した。

調査では、墳丘墓19基などの遺構、珠洲焼の蔵骨器、土師質上器(かわらけ)などの遺物が確認された。遺構と共に伴する蔵骨器・土師質土器は13世紀代のもので、この墓群の造営時期もほぼその年代に比定された。また、調査地区以外の部分においても16基以上の墳丘が視認され、全体で39基以上の墳墓が存在していることが明らかとなった。

平成6年度試掘調査

平成6年9月9日から9月22日までの延べ11日間で県補助金を受けて実施した。対象は古墓群東側の山林約5,000m²で、道路方線の変更に伴う事前の試掘調査として実施した。平成9年度の調査域はこの部分にあたる。

第2次調査（平成8年度本調査）

平成8年11月7日から同年12月17日までの延べ25日間で実施した。対象は平成6年度調査地区の南西で16基以上の墳墓が視認されていた部分、約1,500m²で遺跡の内容を確認した。

その結果、墳丘・集石・五輪塔など45カ所の埋葬施設を発見し、全体で70カ所の埋葬施設を持つ墓群であることが明らかとなった。出土遺物は、珠洲焼の蔵骨器・輸入磁器・土師質皿である。また1次調査では1基しか発見されなかった五輪塔が、元位置を保つもの2カ所を含めて6カ所で発見された。なお調査は、国庫補助金・県費補助金を得て上市町教育委員会が行った。

第3次調査（平成9年度本調査）

平成9年8月21日から同年10月7日までの延べ32日間で実施した。対象は古墓群東側の平坦面で、約5,500m²で遺跡の内容を確認した。

その結果、平安時代のものと考えられる墳丘墓6基、平坦面10、掘立柱建物1、石列1、礎石跡5、石垣遺構1カ所、参道ないし墓道1カ所を検出した。遺物は明確に遺構に伴うものは検出されなかったが、8世紀から12世紀までの須恵器片多数を出土し、併せて繩紋土器・硬玉製品なども出土した。調査は、国庫補助金・県費補助金を得て上市町教育委員会が行った。



第2図 遺跡周辺図 (1/500,000)

第4次調査（平成10年度本調査）

平成10年10月8日から同年12月28日までの延べ33日間で実施した。対象は黒川地区山中の旧真興寺跡と伝承されている平坦面で、約3,200m²で遺跡の内容を確認した。

その結果、本堂跡・塔跡・堂跡と考えられる基壇・礎石・盛土状遺構・池と考える窓み・石敷・山門と考える石段と石垣・湧水地・横穴・大小様々な平坦面などを確認した。遺物は上師器皿・須恵器・珠洲焼・越中瀬戸・唐津などである。時期によって遺物の量に差はあるが、9世紀から18世紀までの遺物を検出した。また今年度は、黒川地区山中の分布調査を行い、大小様々な平坦面を確認した。なお調査は、国庫補助金・県費補助金を得て上市町教育委員会が行つた。

第5次調査（平成11年度本調査）

平成11年9月27日から平成12年3月31までの延べ89日間で実施した。対象は、平成10年度に調査した真興寺跡の再調査として本堂及びその周辺を調査した。また周辺と開谷地区的分布調査及び簡易測量を実施した。その結果、真興寺跡の概ねの構造が明らかとなった。なお調査は、国庫補助金・県費補助金を得て上市町教育委員会が行つた。

第6次調査（平成12年度本調査）

平成12年6月12日から平成13年3月31までの延べ56日間で実施した。対象は、日枝神社裏の平坦面及び字名、舟ノ谷（円念寺山と呼ばれる）の試掘調査及び「穴の谷」霊場周辺の分布調査及び簡易測量を実施した。なお調査は、国庫補助金・県費補助金を得て上市町教育委員会が行つた。

層序

遺構は、表面の落葉・雑草・腐植土(5~10cm)を排除することによって検出される。後世、畑として利用されており所々に削平を受けている。また畑として利用した際に集石の移動があった可能性がある。しかし墳墓状の高まりなどは確認でき、集石も数多く確認できる。このほか円念寺山北側崖下に、行者窟と思われる小規模の洞穴が確認された。

V. 調査結果

日枝神社裏遺跡

1. 遺構（第3~5図、図版7・8）

日枝神社裏遺跡は、平成10年度の分布調査で確認した遺跡である。遺跡は、上山古墓群の西約50m、日枝神社の背後に広がる標高51mから57mの平坦面であり、日枝神社の社域・畑を含めて大小17ヶ所に及ぶ。今回の調査は、現在は杉の植林が行われている5ヶ所の平坦面を対象とした。そのうち2ヶ所の平坦面は山地を開削して作り出されたと考えられる。全体に畑の耕作による削平を受けているものの、集石・石列などが確認でき、調査はそれらを中心に行なった。この他の遺構としては礎石・土塹などを検出した。

平坦面1（第3・4図、図版7・8）

平坦面1は、X79222~79235、Y21232~21260に位置する。面積は約200m²である。山地の斜面を開削して平坦面を作り出しており、山裾に三方を囲まれ台形状を呈する。平坦面2とは約1mの段をなしている。表面の腐植土を排除すると、褐色砂質土の上に集石・小礫及び礎石と考えられる約30cmから約60cmの石が検出される。礎石には平坦面の長軸に平行するラインを結ぶものも見られる。しかし、後世の畑作などによる土地利用によって移動し原位置を保っていないものも多いと考えられ、建物を復元することはできなかった。主に平坦面南端に沿って見られる集石には、

近現代の瓦、陶磁器などが混入しており畑作のために寄せられたものだと考えた。

集石1は平坦面1の西端に位置し、表面の腐植土と積み上げられた小礫を排除することで検出される。平坦面1の西側は幅が狭くなり、ゆるやかなスロープ状に平坦面3につながるが、集石1はその部分を方形に区画するように敷き詰められており、特に南西の角は直角を意識しているように見受けられる。この場所が平坦面1への入口のような役割を果たしていたのではないだろうか。また、集石1上に積み上げられていた小礫や平坦面上に見られる集石は、元来集石1のように平坦面に敷き詰められていた可能性を考えることもできる。

集石2は、平坦面1の北西に位置し20cm前後の礫からなる。集石2の北辺・西辺は直線を意識しており、平坦面・礫石のラインに向きを合わせるため、建物の北西隅の礫石あるいは根石に当たるものと考えられる。

平坦面1では礫石・集石が検出される褐色砂質土を約20cm掘り下げることで淡黄色の地山面に至るが、平坦面のはば中央にトレンチを設定して褐色砂質土を掘り下げたところ、地山を掘り込む土壤2基を検出した。SK1は、長径2.85m、短径1.65m、深さ0.43mを測る不整齊円形の土壤で、底面はほぼ半らになる。埋土は炭化物が混入するきめの細かい黄褐色砂質土である。埋土中から珠洲焼の壺の体部破片が折り重なるように出土している。その他、埋土中から皇宋通宝・鉄釘・銅製の鉢、底面の直上から土師器皿が出土している。土壤上に何らかの施設があり、地鎮あるいは鎮壇の儀式を行なった可能性が考えられる。SK2は、長径1.24m、短径0.9m、深さ0.69mを測る円形の上層で、SK1上から掘り込まれている。出土遺物はないが、埋土中に20cm前後の礫が混入している。土壤を検出したトレチからは、地山を掘り込んで設置された礫石も検出している。

以上から、平坦面1には、地山直上に礫石建物や土壤が築かれた時期と、褐色砂質土上に礫石建物が築かれた時期の、少なくとも2段階の時期があるものと考えられる。

平坦面2（第3・4図、図版8）

平坦面2は、X79208~79224、Y21230~21268、平坦面1の南側に位置するくの字形の平坦面のうち、平坦面1に平行する地区である。面積は約400m²、平坦面1との比高差は約1mである。ほぼ中央に南北方向にのびる高さ最大20cmの段差がある。段差の南端には径約80cmの巨石が置かれる。

調査は平坦面1の裾際にトレンチを設定して行なったが、その結果この平坦面は大規模な造成・整地を行なっており、2段階の時期があることを確認した。現在見られる平坦面は地山を削って造成された平坦面の上に厚さ約90cmの土壌をして造成している。この造成土は平坦面1を開削した際の土砂を用いている可能性が考えられる。下層の平坦面は、平坦面1との比高差約1.8mを測る。地山上で土師器皿を検出している。上層の平坦面では集石3・30cm前後の石・小礫を検出した。

集石3は、直径60cmのはば円形の集石で、根石だと考えた。礫の大きさはは5cmから10cmで越中瀬戸の皿が混入する。

平坦面3（第3・5図、図版7）

平坦面3は、X79188~79230、Y21210~21240、平坦面1の南側に位置するくの字形の平坦面のうち、平坦面1に直交する地区である。面積は約600m²である。山地を開削して平坦面を作り出していると考えられる。石列が確認されるほか、山裾にマウンド状の張り出しが2ヵ所見られる。

石列は、平坦面3の東寄りに位置し、長さ19.5m、幅1.3mを測る。平坦面の長軸からはややずれるが、集石1の西辺の延長線上ではば南北のラインに一致する。土壤状の盛土の上に小礫を積み重ねており、その中に径80cm前後の4つの巨石をはば等間隔に並べている。表面の小礫は一部後世の畑作により集めた礫が重ねられているが、4つの巨石を含めてはば原位置を保っているものと考えられる。4つの巨石からは被熱が確認できる。根石は無く地山に直に置かれている。石列の西側からはまばらではあるものの集石が検出されたが、東側からは集石は検出されなかった。

のことから集石は平坦面3の何らかの施設に関わるもので、石列はその施設を区画するものだと考えられる。石列の周囲から土師器皿・須恵器・寛永通宝などが出上している。

平坦面3から平坦面4・5にかけての斜面の一部で、石垣状に組まれたこぶし大から径80cm前後の石を確認した。現在では崩落したものも見られるが、斜面全体に石が組まれていた可能性が考えられる。

平坦面4・5（第3図、図版8）

平坦面4はX79172～79191、Y21210～21230、平坦面3の南側に位置し、面積は約180m²、平坦面3との比高差は約2mである。南東傾へゆるやかに傾斜しながら高さ約50cmの段差をはさんで平坦面5に至る。平坦面5はX79165～79185、Y21221～21240に位置し、面積は約120m²である。平坦面4の最高所と平坦面5の最低所の比高差は約1.7mである。遺物は表土中より土師器皿が出土している。

集石4は、平坦面3・4から西側のテラス状の小平垣面にかけての斜面に占地する。礫は敷き詰められているよう見え、平坦面3と平坦面4をつなぐ通路の石敷である可能性がある。集石4の横に長径1m、短径70cmの巨石が置かれている。この巨石は全体に被熱しているが、平らな面に柱の跡だと考えられる径約25cmの円形の赤化が確認でき、礫石として使われていたと考えた。この巨石を含め、遺跡全体で径80cm前後の巨石が12個存在するが、これらは礫石が振り起されたものである可能性がある。

2. 遺物

調査により検出した遺物は、土師器皿・須恵器・珠洲焼・越中瀬戸などである。ほとんどの遺物は表土を排除し遺構面を検出する際に出土した。SK1からは同一個体の珠洲焼の壺部破片が折り重なるように出土したほか、銅製の鏡が出土した。以下、遺構ごと、図版ごとに遺物の特徴を述べる。

平坦面1 出土遺物（図版2・3・12～14）

図版2の1～18、図版12の①～⑥は土師器皿である。このうち図版2の3・7・8・11～15・17、図版12の③～⑥は集石1から出土した。1～14は口縁部で、口径は8～14cmである。2・4・7・14は内外面にタールが付着する。1～4・18は口縁端部がややとがる。5・6・9・10は口縁端部をつまみ上げる。6・9・15・18はロクロ成形である。18は摩滅が著しいが、底外面に回転糸切り痕が残る。図版2の30は水滴だと考えられ、磁器製でうさぎあるいは猫のような動物をかたどる。図版3の3～8・10・11は珠洲焼である。このうち6・8は集石1から出土した。3は壺の口縁部で、口径は50.4cmである。外面は口縁部直下から平行叩きを施し、内面は不定方向の撫でを施す。平行叩きは3cmあたり8日と粗い。珠洲焼の編年のV期に属すると考えられる。4～7・10は甕ないし壺の体部破片である。5・7は3と同一個体と考えられる。8・11は描り鉢である。8は内面におろし目が残る。11は底部で、底径は13.6cmである。器体は直線的に開く。図版2の12・13は描り鉢である。12は底径11cmである。内面におろし目、底外面に回転糸切り痕が残る。内外面に錆軸を施す。平坦面2のトレンチ中から出土した破片と接合した。13は底径9.0cmである。おろし目は摩滅が著しい。内外面に錆軸を施す。図版3の14・15は越中瀬戸の匣鉢である。14は口径16.2cmで口縁端部は平縁に成形する。15は口径13.8cmで口縁端部に段差を持つ。体部は直立し筒状を呈する。ロクロ口が明瞭に残る。14は内外面に錆軸を施す。15は外面に錆軸を施し、内面は無釉である。17は寛永通宝である。

SK1 出土遺物（図版2・12・13）

図版2の28・29、図版12の②～⑨は土師器皿である。いずれもSK1の底面直上から出土した。28は口径10.2cmを測る。非ロクロ成形で口縁端部はやや外に開く。②・③・⑩～⑨は28の同一個体の破片である。29は底部で、非ロクロ成形である。⑩～⑨は28・29とは別個体の破片である。図版2の34～39は埋土中から出土した。34～36は鉄釘である。いずれも鎧が著しいが、角釘で頭部は折り曲げた形態のものである。37は銅製の鏡だと考えられる。東部の直径

は1.7cm、軸の長さは0.8cmを測る。頭部表面にはわずかに銅金が残る。38は皇宋通宝である。39は珠洲焼の甕である。5cm大から15cm大の破片が折り重なるように出土した。外面の平行叩きは3cmあたり13目と細密である。

平坦面2出土遺物（図版2・12）

図版2の19~21、図版12の⑦~⑪は土師器皿である。19は口径8.0cm、20は口径9cmを測る。ロクロ成形である。いずれもトレンチ中から出土した。21は底径6.0cmを測る。下層の平坦面の地山直上から出土した。その他、図版3の12の越中瀬戸彌り鉢の破片がトレンチ中より出土している。

集石3出土遺物（図版2・14）

図版2の33は越中瀬戸の皿である。集石3の蝶中から出土した。底径は4.2cm、断面が逆三角形を呈する付高台で、体部上半には灰釉、体外面下半・見込みには鈎釉を施す。

平坦面3出土遺物（図版2・3・12~14）

図版2の22~24、図版12の⑫~⑯・⑯~⑯は土師器皿である。22は口径10.8cm、器高2.3cm、底径6.3cmを測る。非ロクロ成形で口縁端部にヨコナデ調整を施す。23は口径9.0cm、24は口径8.0cmを測る。非ロクロ成形である。図版3の1・2は須恵器である。1は杯蓋で、口径は12.8cmである。口縁端部は外反し、内外面はロクロ撫で調整を施す。2は甕の体部破片である。外面に平行叩き、内面に同心円文を施す。その他に図版3の9の繩文土器が出土している。図版3の16は越中瀬戸の匣鉢である。口径16.4cmで、体部は直立し筒状を呈する。ロクロ目が明瞭に残る。外面に鉄釉、内面に鈎釉を施す。口縁端部は平線に成形し、無釉である。18は寛永通宝である。図版13の①は鉄錢である。鎧の付着が著しく銭名は判読できない。

平坦面4出土遺物（図版2・12）

図版2の26・27、図版12のは土師器皿である。26は口径10cmを測る。内外面にタールが付着する。非ロクロ成形で口縁端部はとがる。27は口径11.8cmを測る。非ロクロ成形で口縁端部をつまみ上げる。⑯は底部破片である。

平坦面5出土遺物（図版2・12）

図版2の25は土師器皿である。口径は8.0cmを測る。非ロクロ成形で口縁端部が外に開く。

集石4出土遺物（図版2・14）

図版2の32は越中瀬戸の丸碗である。口径9.4cm、器高6.6cm、底径4.4cmである。体部下半は丸みを帯び、口縁部はややすはりながら直線的に立ち上がる。割り出し高台である。体部には鉄釉を施し、高台は無釉である。図版12の②・④は土師器皿の破片である。は内面にロクロ撫で調整を施す。

表探遺物（図版2・14）

図版2の31は調査区で採集した砥石である。現存長は12.5cmを測る。欠損するが各面に使用痕が残る。

円念寺山遺跡

1. 遺構（第6図、図版9・10）

円念寺山遺跡は、平成11年度の分布調査で確認した遺跡である。遺跡は、X78986~78956、Y21320~21410、上古墓群の南、標高83mから87mの円念寺山の尾根上に位置し、大小3ヵ所の平坦面からなる。総面積は約1000m²、全長は90mに及ぶ。遺跡からは上古墓群・塚跡東遺跡・伝承真興寺跡・日枝神社裏遺跡を一望することができ、東には駿岳を仰ぐ。特に尾根の先端からは、西に黒川の集落を見渡し、さらに富山平野・富山湾を遠望することができる。

今年度の調査では、腐植土を排除して遺構を確認することを目的とした。平坦面1は平坦面2・3より高所に位置し、平坦面からなだらかに下る細尾根沿いにびっしりと集石が連なる。尾根の先端には集石に接して石を組んだ石棚が露出している。平坦面2・3は後世の畑作により削平を受けていると考えられるが、北側の崖沿いに畝状に集石が残っ

ている。平坦面3は現在は杉の植林が行われている。

集石（第6図、図版9・10）

平坦面1で18基、平坦面2で1基、平坦面3で11基、計30基の集石を確認した。平坦面1の集石は平坦面から尾根沿いに位置し、平坦面2・3の集石は北側の崖沿いに位置する。これらは集石墓、経塚などの可能性が考えられるが、今年度の調査ではいずれか確定できなかったため、盛土が主体となるものも含めてすべて集石として扱うこととした。平坦面1から尾根の先端にかけて、18基の集石がほぼ一直線に連なる。この集石群には、積石をするもの、墳丘状の盛り上がりを持つもの、方形に区画するものなどいくつかの種類が確認できた。

集石1～12は、約3mの高低差を持つ細尾根沿いに築かれた集石である。集石1は、尾根の先端に位置し、積石を行なうものである。50cm大のやや平坦な石を小口を意識して2段に積む。平面形は長方形であるが、途中で屈曲しヘの字形になる。南西の角に石櫛が露出している。集石2は、集石1の東側に接し、方形に区画するものである。南側には40cm大の石を段状に並べおり、その上の表土中から刀子が出土した。集石6は、尾根を分断する溝状の地形を埋めるように石が配されている。集石7は、北側に50cm大の石を一列に並べ、全体では方形を意識している。集石8は、40cm大の石による南北2列の石列で外側を区画し、内側は5cmから20cmの櫛が積まれている。区画の中央には約10cmの盛土の下に石櫛が埋設されている。また区画の西辺中央からは短刀が斜めに刺さった状態で出土した。集石11は30cm大の石と小櫛を積み重ねた方形の集石で、集石中から珠洲焼の壢り鉢・壺の破片が出土している。

集石13～18は平坦面1に築かれた集石で、それぞれ方形を意識している。後世の畑作で平坦面2が造成された際に一部削平を受けていると考えられる。集石上に珠洲焼の壺・壢り鉢の破片が散布している。

集石19～30は平坦面2・3の北側の崖沿いに立地する集石である。その内、集石22・24はマウンド状の盛土の上に集石が確認される。集石29は、歓状の集石からつながる高さ約70cmの土壘状を呈し、その上に集石を施す。現状では崖側が崩落しているためわかりにくいか、集石は方形を意識しているようである。昨年度の分布調査ではその崩落した崖側から珠洲焼の壺・壢り鉢を採集している。集石30も集石29と同様に崩落はしているものの、方形を意識していると考えられる。集石上に珠洲焼の壺・壢り鉢の破片が散布している。

石櫛（第6図、図版10）

2基の石櫛を確認した。上部が露出した石櫛1、集石の地下施設である石櫛2という違いはあるが、両者とも1辺が約50cmで、平らな側石を用いて方形に囲む構造を持つなど、共通点が見られる。

石櫛1は、尾根の先端に位置し集石1に隣接する。石櫛の幅は約55cmで、厚さ20cm前後の側石を配し約25cm四方の石室を構成する。上部約30cmが露出しており、内側は5cm大の櫛が混じる黄褐色土で埋まっている。

石櫛2は、集石8のほぼ中央を掘り下げることで検出した。集石8の地下施設であり、石列と軸を合わせている。石櫛の幅は約50cmで、厚さ10cm前後の5枚の側石と、平坦な底石で約22cmの石室を構成する。石櫛内部は20cm大の石と黄褐色土で埋まる。

石組（第6図、図版10）

集石9から集石12にかけての北側の崖面上部に石組を確認した。崖面は急で一部崩落しているが、ここ以外にも、北側の崖面上部ほぼ全体にわたって石組を施している様子を確認することができる。石組は南側の斜面には見られず、遺跡の北に位置する上山古墓群からの見栄えを考慮して施されたものではないだろうか。

2. 遺物

調査により検出した遺物は、珠洲焼・刀子などである。ほとんどの遺物は表土を排除し集石を検出する際に出土した。その他、集石2から刀子、集石8から短刀、集石11から珠洲焼の壢り鉢・壺が出土した。また、昨年の分布調査

では珠洲焼の攝り鉢・壺を採集した。以下、遺構ごと、図版ごとに遺物の特徴を述べる。

短刀・刀（図版 5・18）

遺構にともなって短刀・刀子が出土している。図版 5 の 1 は短刀である。集石 8 の区画西側から、刃先を下に斜めに刺さった状態で出土した。全長 33.9cm、刃長 27.2cm、中子長 6.7cm である。鍔の付着が多いが一部に木質部が残る。庵棟作りで、刃先はふさる（下方に反る）。2 は刀子である。集石 2 の表上を排除した際に出土した。全長 27.3cm、刃長 18.0cm、中子長 9.3cm である。2 点ともその特徴から平安後期から鎌倉期のものと考えられる。

集石 11 出土遺物（図版 3・15）

図版 3 の 19・20 は集石 11 から出土した。19 は珠洲焼の片口鉢で、20 の蓋と考えられる。口径 27.4cm、器高 12.2cm、底径 12.0cm である。ふくらみを持って立ち上がる器体を持ち、口縁外端はしっかりと面を取る。注口は口縁の外周線にコの字状に丁寧に作られている。内面におろし目はない。外底面に回転糸切り痕を残し、使用痕は認められない。黄灰色を呈し、焼きは良好である。珠洲焼の編年のⅠ期に属するものと考える。20 は珠洲焼の壺口縁である。口径 22.0cm で玉縁状の口縁に沈線を施す。口縁部のみの出土で、全体形は不明である。同じく珠洲焼の編年のⅠ期に属するものと考える。

その他の集石出土遺物（図版 3～6・15～17）

以下の遺物は表上を排除し集石を検出する際に出土したものである。集石上に散布しており原位置は保っていないが、同一個体の破片がある程度まとめて出土している。

図版 3 の 22 は集石 26 から出土した珠洲焼の壺の口縁である。口径は 12.0cm で、口縁端部を嘴状に成形する。23 は集石 28 から出土した珠洲焼の壺の口縁である。口径は 29.6cm、口縁端部を嘴状に成形する。焼きはやや甘い。いずれも珠洲焼の編年のⅡ期を下らない時期のものと考えた。

図版 3 の 21・図版 4 の 1～5・7 は珠洲焼の鉢である。図版 3 の 21 は集石 16・17 周辺から出土した片口鉢である。半球状の器壁を持ち、口縁外端はしっかりと面を取る。内面にはロクロ成形による段が残り、おろし目はない。外底面に回転糸切り痕を残し、使用痕は認められない。灰黄褐色を呈し、焼きは良好である。珠洲焼の編年のⅠ期に属するものと考える。図版 4 の 1 は集石 29、2・5 が集石 27、3・4 が集石 30、7 が集石 24 から出土した。1・2 はいずれも口縁外端にしっかりと面を取る。3 を除いておろし目は認められない。3 はおろし目が曲線文で装飾的に施される。これらの攝り鉢も珠洲焼の編年のⅡ期を下らない時期のものと考えた。

図版 4 の 6・8～18、図版 5 の 3～16、図版 6 の 1～9、図版 16 の ① は珠洲焼の壺もしくは壺の体部破片で、集石上に散布していたものである。その他に、集石 29・30 周辺で近世、近代の遺物が出土している。

平成 11 年度分布調査探集遺物（図版 6・18）

昨年の分布調査で、集石 29 の周辺から遺物を採集した。図版 6 の 16・17 は集石 29 の崩落した崖面に露出しており、藏骨器と考えられる。16 は珠洲焼の壺である。口径 11.5cm、器高 22.9cm、最大径 17.1cm、底径 8.1cm でいわゆる壺 R 様 A 類に分類される。全体がやや重心の低い倒卵形で、口縁は丸みを持ちながら外反するが、口縁端部でやや内湾し丸みを持った口縁を印象づけている。黄灰色の肌をなし、焼きは良好である。内外面にロクロ成形された痕跡が残り、外底面に静止糸切り痕を残す。頸部から胴上部に彫刻状工具により一筆書きの 2 段の波状文が巡る。また、同一の工具で胴部から底部に左上から右下に継方向の波状文が 2 列施されている。この裏側には胴上部の波状文に付けて継方向の波状文が梵字のような描き方で施されている。珠洲焼の編年のⅠ期に属するものと考える。底部端は鋭く、使用痕は認められない。17 は珠洲焼の片口鉢で 16 の蓋と考えられる。口径 21.2cm、器高 8.8cm、底径 8.1cm である。こんもりとふくらみを持って立ち上がる器体を持ち、口縁外端でしっかりと面を取っている。注口は口縁の外周線にコの字状に丁寧に作られている。内面におろし目はない。外底面に静止糸切り痕を残し、使用痕は認められない。肌は緻密で

灰褐色を呈する。珠洲焼の編年のⅠ期のものと考えた。18・19・20・21・①はいずれも珠洲焼で、18・20・21が壺、19・①は鉢の破片である。①は今年度出土した図版4の1と接合した。いずれも珠洲焼の編年のⅡ期を下らない時期のものと考えた。

3. 洞 穴 (図版11)

円念寺山の北側の崖面に地元では古くから行者窟と考えられる洞穴があることが知られていたが、今回の調査で実際に確認した。洞穴は円念寺山遺跡の立地する尾根先端のやや西側の中腹に位置する。開口部を北東に向かって、正面に上山古墓群を、眼下に護摩堂への道、郷川を望む。江戸時代、白心行者が穴の谷で修行する前に使っていたと伝えられる。

洞穴は、幅170cm、奥行きは長辺200cm、短辺80cm、高さ110cmの方形で、開口部は斜めになり前方にテラスを作り出す。内部には、開口部の横の壁際に1辺50cm、深さ30cmの土壙が確認できる。壁面には最近のものと思われる落書きが多く見られるが、その中に当時のものと考えられる円形の彫り込みが確認できる。

崖面にはさらにいくつかの洞穴が存在する可能性が考えられる。今後、今回発見した洞穴の調査をはじめ、周辺の詳細な調査を行なう必要がある。

黒川穴の谷靈場周辺の分布調査について (第7図・図版11)

今年度は黒川村北東の穴の谷靈場周辺の分布調査と簡易測量を実施した。調査は、富山大学人文学部国際文化学科考古学研究室の全面的なバックアップの下、調査担当者及び学生が行った。調査は、対象域を上山古墓群から穴の谷靈場周辺と靈場東側の自然歩道沿いの2地区に分け、それぞれ人为的に作り出された平坦面の観察を4班に分けて実施した。その結果、大小5カ所の平坦面を確認した。

平坦面13は、穴の谷靈場への参道周辺の平坦面を総称して名付けた。参道の山側に3カ所、谷側に1カ所あり、それぞれ大小の平坦面からなる。標高は参道付近で約120mである。規模は最大で約25×15m、最小で約10×2mである。谷側の平坦面は舌状の丘陵端部と谷地形からなり、開削して造成した平坦面やマウンドが確認できた。

平坦面14は、上山古墓群の北から穴の谷方面にのびる尾根上の古道に沿って確認される平坦面を総称して名付けた。標高は約90m～120mにわたり、規模は最大で約45×20m、最小で約4×2mである。一部に礎石と考えられる石が散見できる。

平坦面15は、塚跡東遺跡の北東約50m、平坦面13とは山頂を挟んで反対側に位置する平坦面である。標高は約90m、規模は約70×23mである。

平坦面16は、穴の谷靈場東側の尾根上の自然歩道に沿って確認される平坦面を総称して名付けた。標高は約120～175mにわたり、規模は最大で約20×10m、最小で約5×5mである。

平坦面17は、郷川に面する台形状の丘陵に位置する3カ所の平坦面を総称して名付けた。自然歩道から続く古道に沿って見られる。標高は約100m、規模は最大で約50×30m、最小で約10×10mである。

以上、分布調査の調査結果である。上山古墓群から靈場へ向かう尾根筋、靈場の参道沿いなど、穴の谷靈場周辺には大小さまざまな平坦面が点在していることが確認できた。今後はさらに範囲を広げて分布調査を行なう予定である。

V まとめ

両遺跡についていくつかの検討を試みたが、その中で得られた見解を整理し、まとめに変えたい。

1. 日枝神社裏遺跡は、上山古墓群の西約50mに立地する。両遺跡は穴の谷靈場に向かう道路をはさんでその入り口部分に一対で存在する。日枝神社は室町時代のはじめから存在したと伝えられているが、日枝社は修驗道と深くかかわるものと考えられており、この遺跡は立地的にも上山古墓群と関係があるものと考えられる。
 2. 遺跡は、日枝神社の社域・畠を含めて大小17ヶ所に及ぶ平坦面である。調査は5ヶ所の平坦面を対象とした。遺構は、後世の土地利用によって全体に削平を受けているが、平坦面1で集石・礎石・土壌・平坦面2で集石・平坦面3で石列・集石・石垣状遺構、平坦面4で集石を検出した。
 3. 平坦面1は、山地を開削して作り出された平坦面で、礎石・集石・土壌SK1・2が検出された。礎石・土壌の検出状況から少なくとも2時期存在することが確認された。SK1からは銅製の鋸・鉄釘・土師器皿・珠洲焼の甕などが出土した。何らかの施設があり、地鎮あるいは鎮壇などの儀式を行なった可能性を考えた。
 4. 平坦面2は、大規模な盛上・整地を行なっており、造成以前と以後の2時期にわたって利用されていたと考えた。
 5. 平坦面3で小砾と等間隔に並べられた4つの巨石からなる石列を検出した。
 6. 集石4は、平坦面4に立地し、平坦面4と平坦面3をつなぐ石敷きの通路である可能性を考えた。
 7. 出土遺物は、十郎器皿・須恵器・珠洲焼・越中瀬戸などである。年代は、珠洲焼の編年でV期のものが出土しており、日枝神社が室町時代のはじめから存在したとする伝承を裏付けることとなった。
 8. 円念寺山遺跡は、上山古墓群の南、標高約80mの円念寺山の尾根上に位置し、大小3ヶ所の平坦面からなる。遺跡からは、上山古墓群や伝承真興寺を一望するほか、東に雙岳を仰ぐ。また尾根の先端からは、西に富山平野・富山湾を遠望することができる。平坦面1から尾根の先端にかけては集石が連なる。平坦面2・3は畑作による削平を受けるものの、崖際には畝状に集石が残っているのが確認された。
 9. 集石は、積石をするもの、墳丘状の盛り上がりを持つもの、方形に区画するものなどが確認できた。また、地下施設として石槨を持つ集石が確認され、同様の石槨が露出しているものが見られた。これらの集石群・石槨は、集石墓あるいは経塚である可能性が考えられる。
 10. 遺跡の北側の崖上部に石組を確認した。一部崩落しているものの、崖上部ほぼ全体に石組みを施していると考えられる。南側には見られず、遺跡の北側に位置する上山古墓群からの見栄えを考慮したものだと考えた。
 11. 出土した遺物は、珠洲焼・短刀・刀子である。珠洲焼はすべて編年の中Ⅰ期からⅡ期に収まるもので、短刀・刀子は平安後期から鎌倉初期のものである。このことから、遺跡の年代は12世紀後半を中心と考えられる。これは上山古墓群の造営開始時期と重なり、今後上山古墓群とも絡めた検討が必要である。
 12. 円念寺山の北側の崖面で行者窟と考えられる洞穴を確認した。洞穴は、円念寺山の尾根先端からやや西側の中腹に位置し、幾摩堂へ向かう道、郷川に面する。方形の小規模なもので幅170cm、奥行200cm、高さ110cmを測る。江戸時代に白心行者が修行していたと伝えられる。
 13. 穴の谷靈場周辺の分布調査と簡易測量を行なった結果、穴の谷靈場周辺には大小さまざまな平坦面が点在していることが確認された。上山古墓群から靈場へ向かう尾根上、靈場の参道沿い、靈場のある谷の東側の尾根上などで人為的に作り出された平坦面を確認し、一部では礎石と考えられる石やマウンドなども散見された。
- 以上であるが、今年度までの調査で黒川を含む周辺一帯には多くの遺跡が存在し、それらが密接なつながりを持っているものと考えられた。引き続き調査を継続し、全体像を明らかにしたい。

引用・参考文献

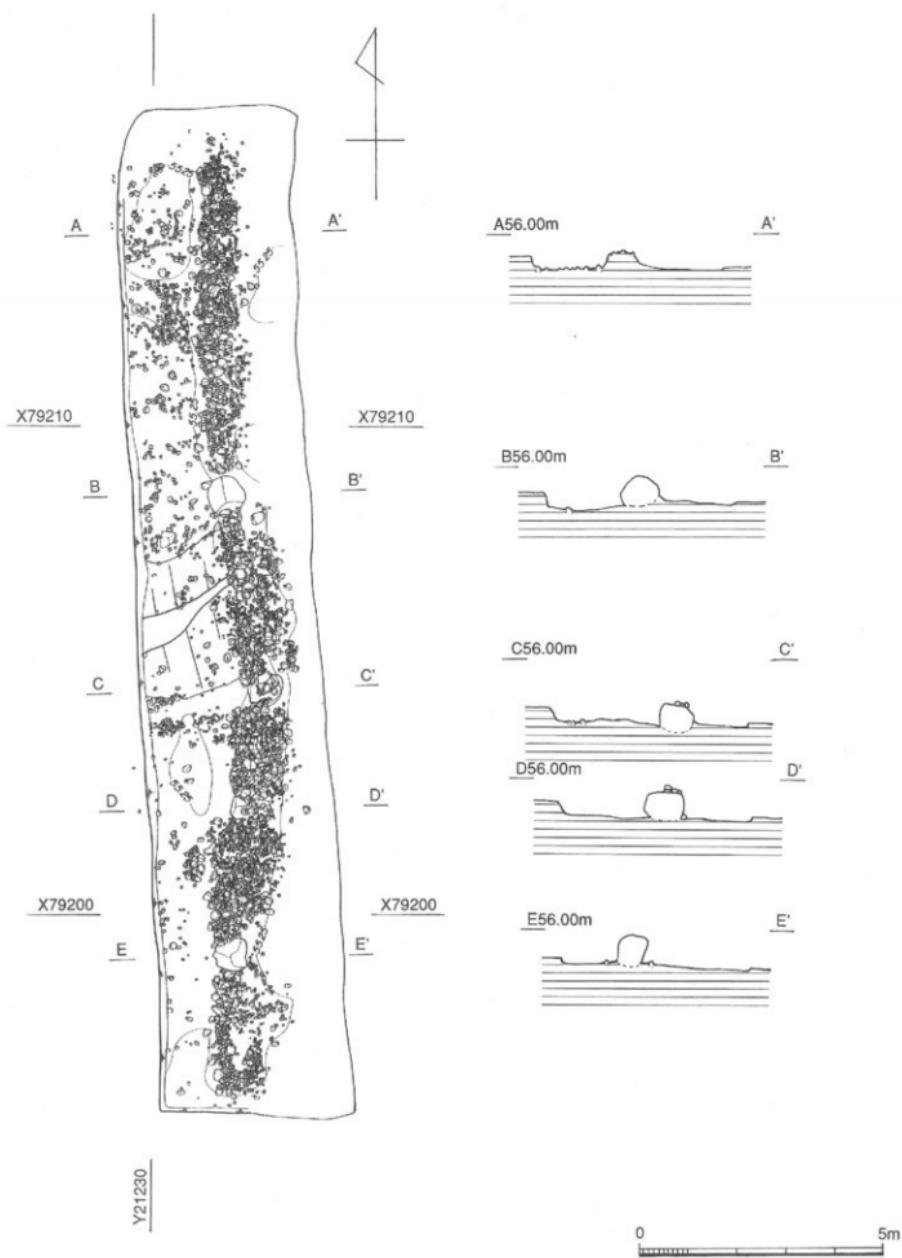
- ア 宇野隆大・西井龍儀他 1993 「第二章 医王の山と里の遺跡を探る」『医王山文化調査報告書 医王は語る』福光町・医王山文化調査委員会
- カ 錄田 勉 1997 「岩手県内の経塚の検証2—経塚の造構と墳墓の造構—」『岩手考古学会』9号
上市町 1970 『上市町誌』
上市町教育委員会 1995 『富山県上市町黒川上山古墓群発掘調査概報』
上市町教育委員会 1997 『富山県上市町黒川上山古墓群第2次発掘調査概報』
上市町教育委員会 1998 『富山県上市町黒川上山古墓群第3次発掘調査概報』
上市町教育委員会 1998 『富山県上市町黒川上山古墓群第4次発掘調査概報』
上市町教育委員会 1998 『富山県上市町黒川上山古墓群第5次発掘調査概報』
神戸市教育委員会・神戸市健康教育公社 1984 『地下に眠る神戸の歴史展Ⅱ』
- サ 財富山県文化振興財団 埋蔵文化財調査事務所 1996
『梅原胡麻堂遺跡発掘調査報告(遺物編)―東海北陸自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘報告Ⅱ』
静岡県考古学会 1997 『静岡県における中世墓』 静岡県考古学会シンポジウム1996年度
関 秀夫 1985 『経塚』 ニュー・サイエンス社
関 秀夫 1990 『経塚とその遺物』『日本の美術292』 至文堂
- タ 富山県 1984 『富山県史 通史編Ⅱ 中世』
- ハ 兵庫県埋蔵文化財調査事務所 1985 『莊園・館・経塚』 兵庫県埋蔵文化財調査事務所展示会図録2
北陸中世土器研究会 1994 『中世北陸の寺院と墓地』 第7回北陸中世土器研究会資料
- マ 見附市教育委員会 1977 『小栗山不動院裏山経塚群 新潟県見附市小栗山不動院経塚発掘調査報告書』
宮田進・ 1988 「越中瀬戸の窯資料(1)」『大境』 第12号
『密教大辞典』 1931 法藏館
- ヤ 吉岡康暢 1994 『中世須恵器の研究』 吉川弘文館



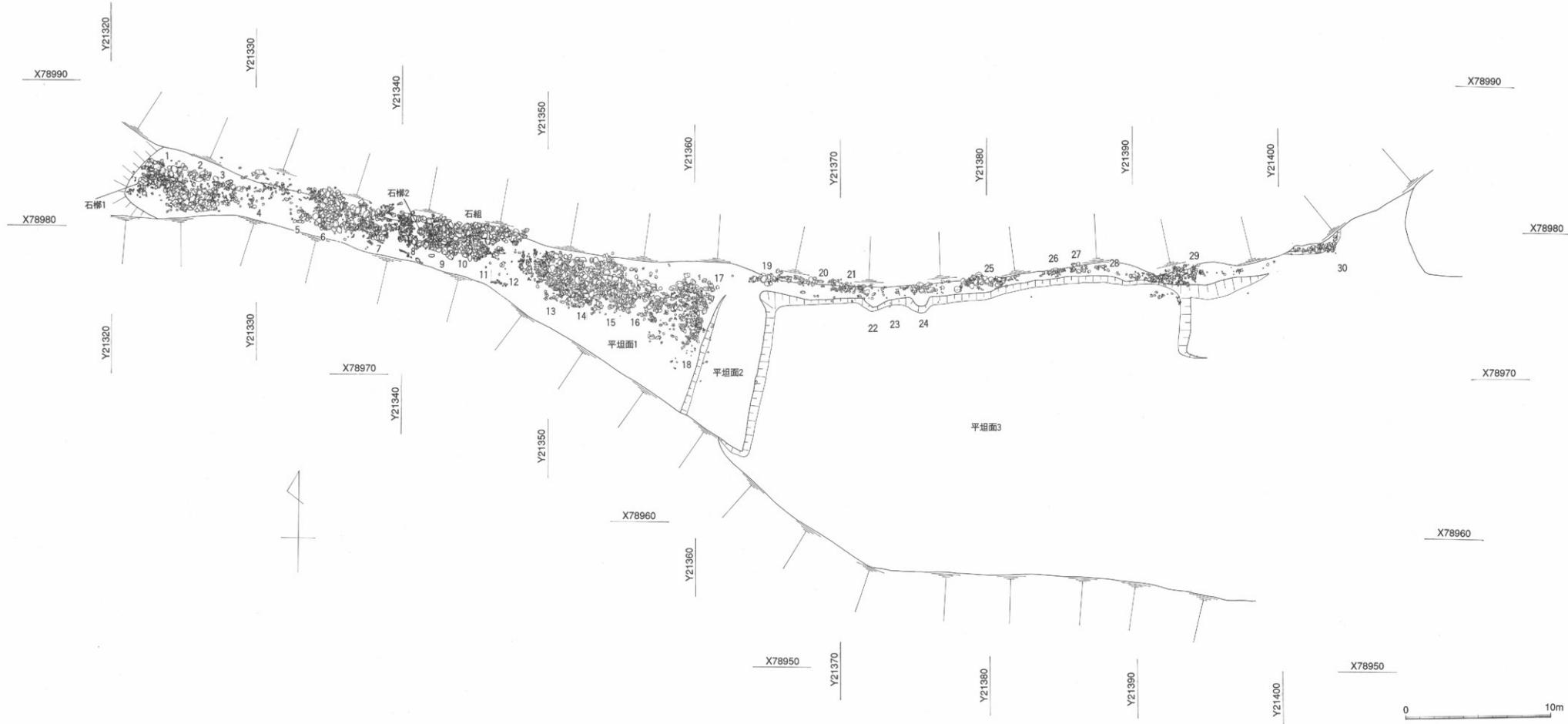
第3図 日枝神社裏遺跡遺構全図（縮尺 1/300）



第4図 日枝神社裏遺跡構造実測図（縮尺 1/100） 平坦面1・SK1



第5図 日枝神社裏遺跡遺構実測図（縮尺 1/100） 石列



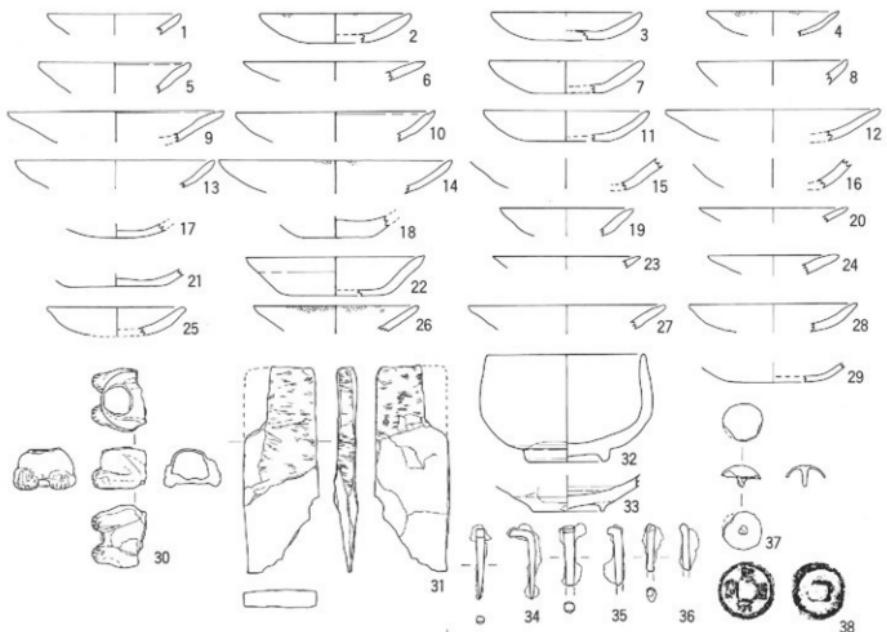
第6図 円念寺山遺跡遺構全図（縮尺 1/5000）



第7図 黒川地区周辺遺跡(霊場関係)分布図(1/5000)

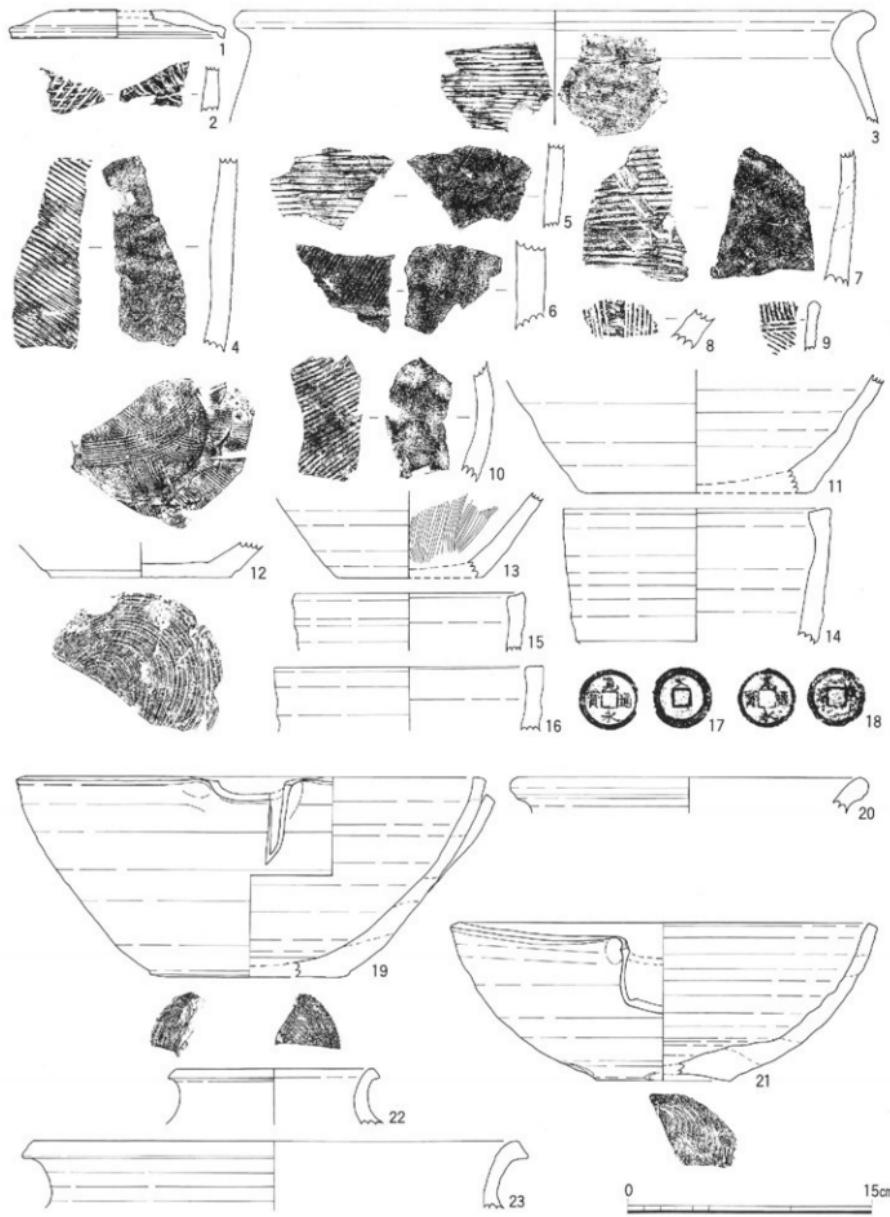


図版一 黒川上山古墳群周辺航空写真(約1/6000)



図版2 遺物実測図 (縮尺 1~36:1/3, 37~38:1/2, 39:1/4)

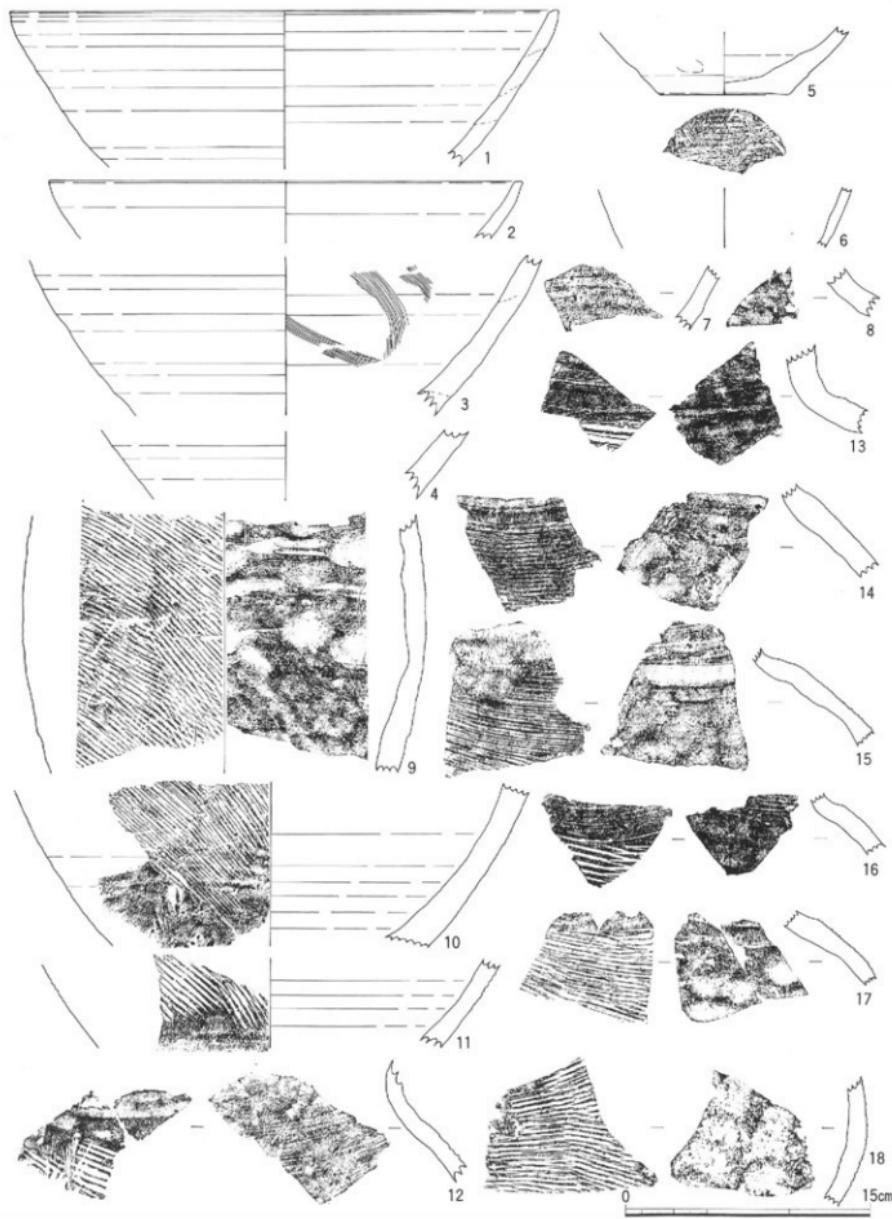
日枝神社裏遺跡：平坦面1 (1・2・4~6・9・10・16・18・30), 集石1 (3・7・8・11~15・17), 平坦面2 (19~21), 平坦面3 (22~24), 平坦面4 (26・27), 平坦面5 (25), 集石3 (33), 集石4 (32), SKI (28・29・34~39), 表採 (31),



図版3 遺物実測図 (縮尺 1・2・4~16・19~23:1/3, 3:1/4, 17・18:1/2)

日枝神社裏遺跡：平坦面1（3~7・10~14・17），集石1（6・8・15），平坦面3（1・2・9・16・18）

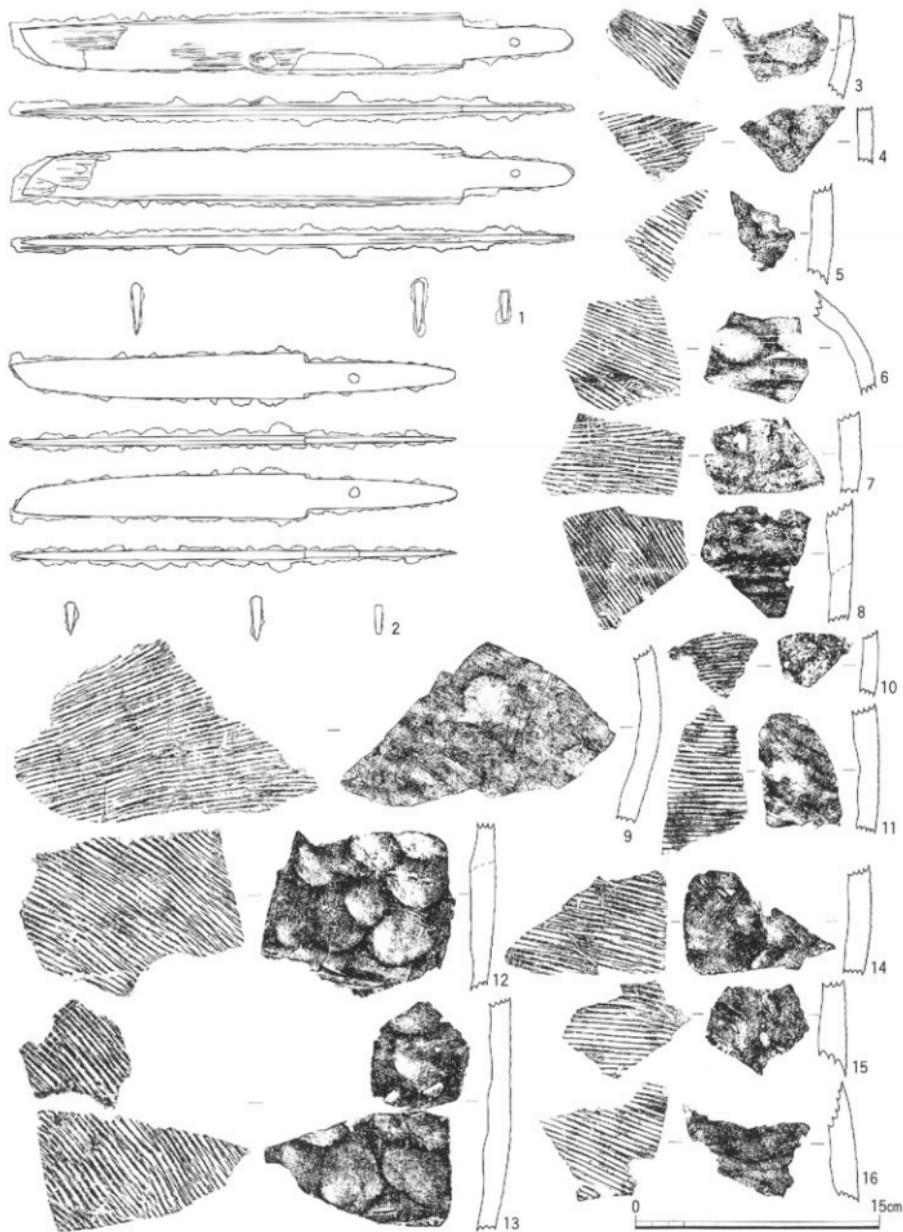
円念寺山遺跡：集石11（19・20），集石16・17（21），集石26（22），集石28（23）



図版4 遺物実測図（縮尺 1/3）

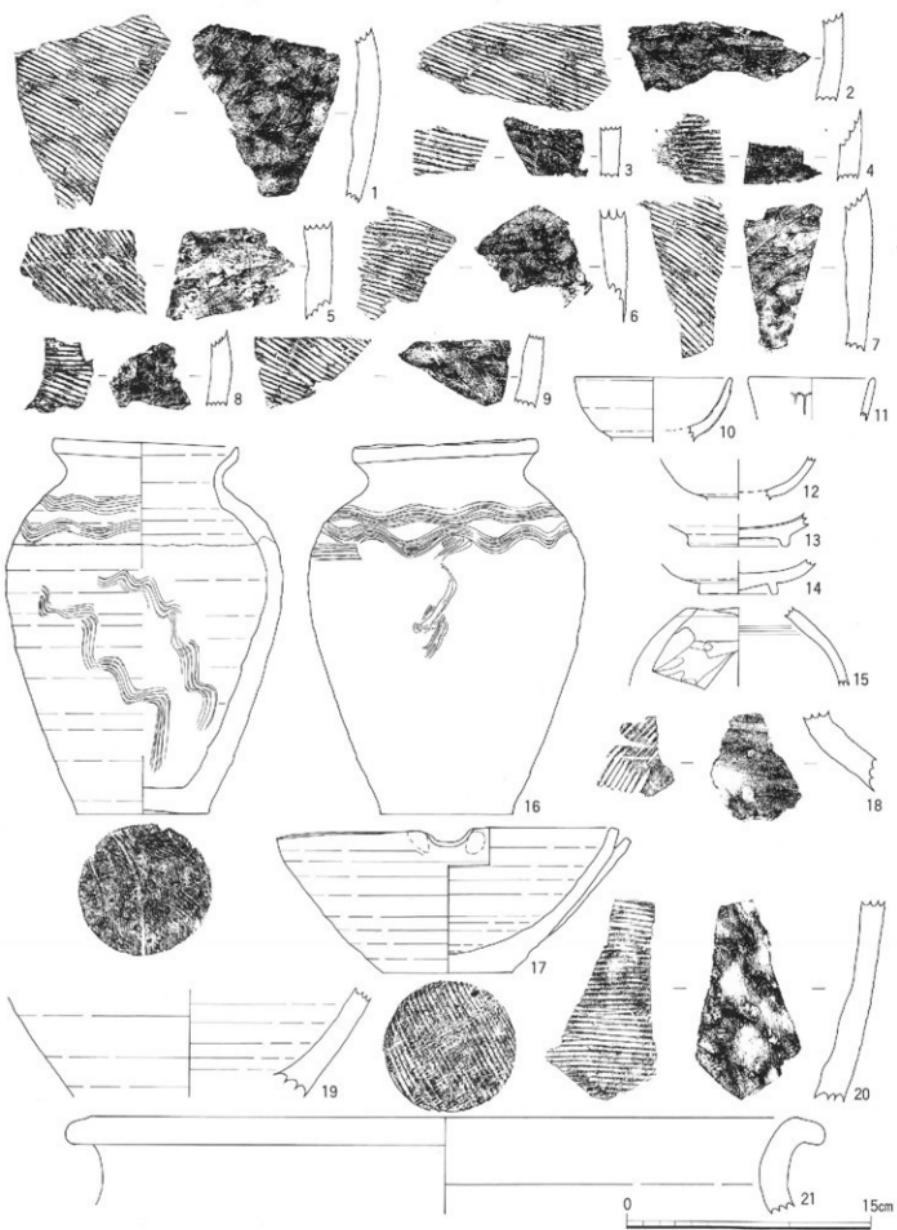
円念寺山遺跡：集石13(8), 集石16(9・14), 集石20(12・18), 集石21(10・15), 集石24(7・11・16), 集石27(2・5・6),

集石29(1・13), 集石30(3・4), 平坦面1(17)



図版5 遺物実測図 (縮尺 1/3)

円念寺山遺跡：集石2（2），集石8（1），集石19（6），集石20（3・4・7），集石24（9・12～14），集石25（8・10），
集石29（11・15・16），平坦面2（5）



図版6 遺物実測図 (縮尺 1/3)

円金寺山遺跡：集石29（1～9・12），集石30（10・11・13～15），平成11年度分布調査採集遺物（16～21）



図版7 日枝神社裏遺跡
1.遺跡全景（東より・空中写真），2.平坦面1（北東より），3.石列（南西より）



図版8 日枝神社裏遺跡

1.SK1(南より), 2.集石3(南より), 3.集石1(北より), 4.平坦面2造成上面(東より), 5.集石4(南より),
6.作業風景



図版9 円念寺山遺跡

1. 漢跡全景（西より・空中写真）。2. 石堆全景（東より）



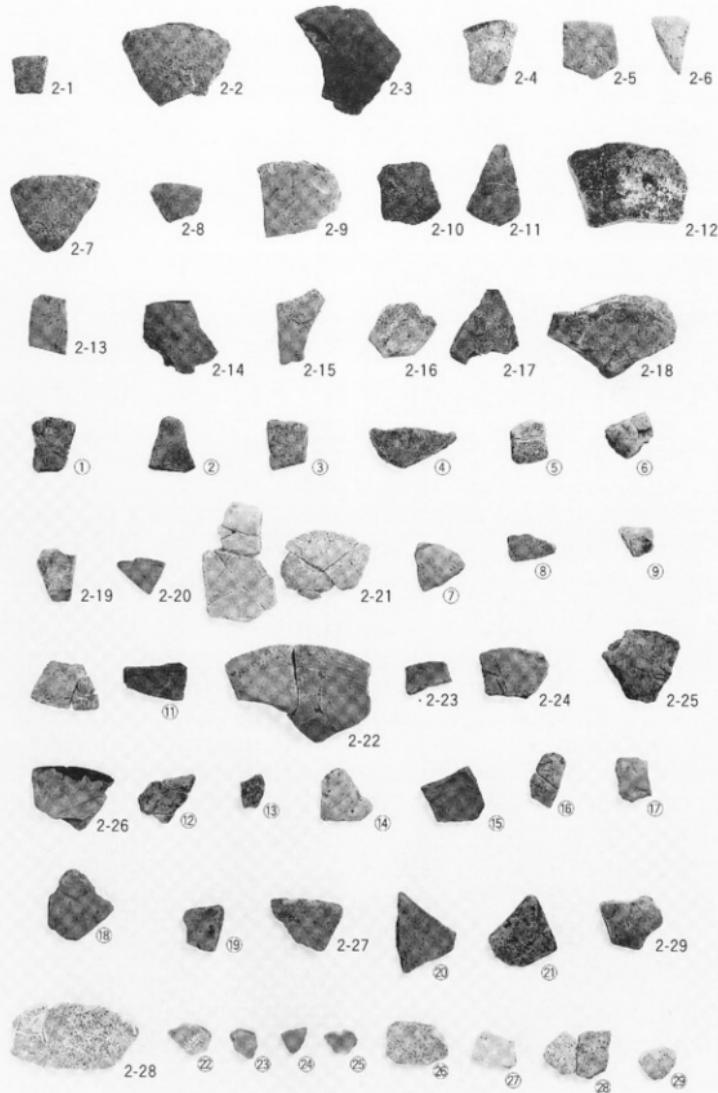
図版10 円念寺山遺跡

1.石構1（西より）, 2.石構2（南より）, 3.石組（西より）, 4.集石8刀出土状況（西より）, 5.集石30（西より）, 6.作業風景



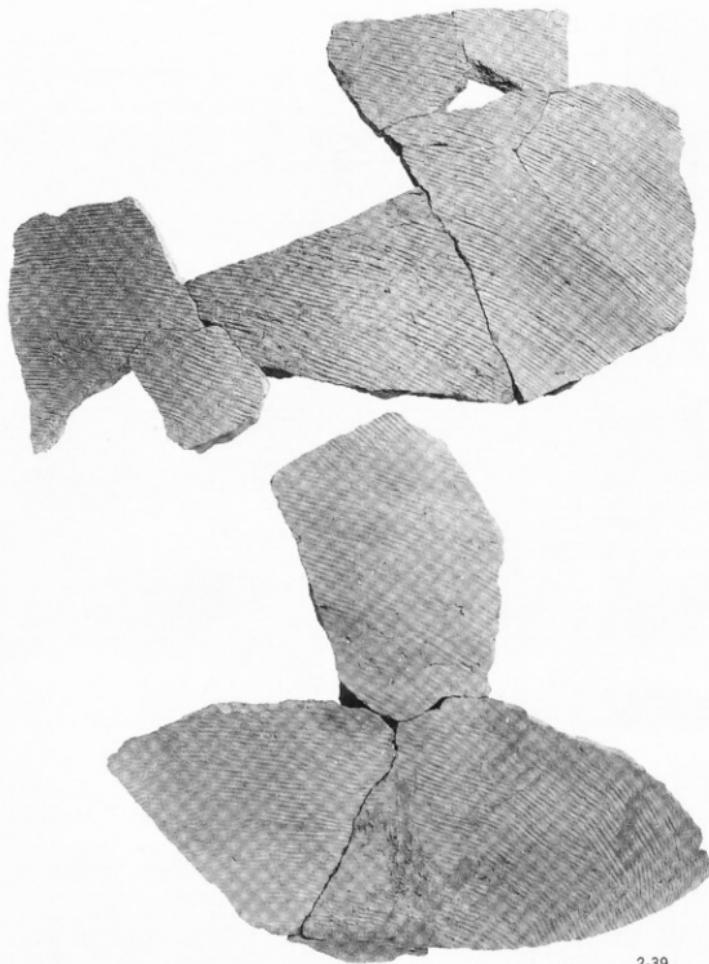
図版11 黒川地区周辺遺跡

1.平担面 1 5, 2.円念寺山行者窟, 3.4.平担面 1 3 実測風景, 5.平担面 1 4 実測風景, 6.平担面 1 5 実測風景



図版12 遺物写真（縮尺1／2）

日枝神社裏遺跡：平坦面1・集石1・集石3・平坦面2・平坦面3・平坦面4・平坦面5・SK1出土（図版2参照）



2-39



2-38



3-17



①



3-18



2-37



2-35

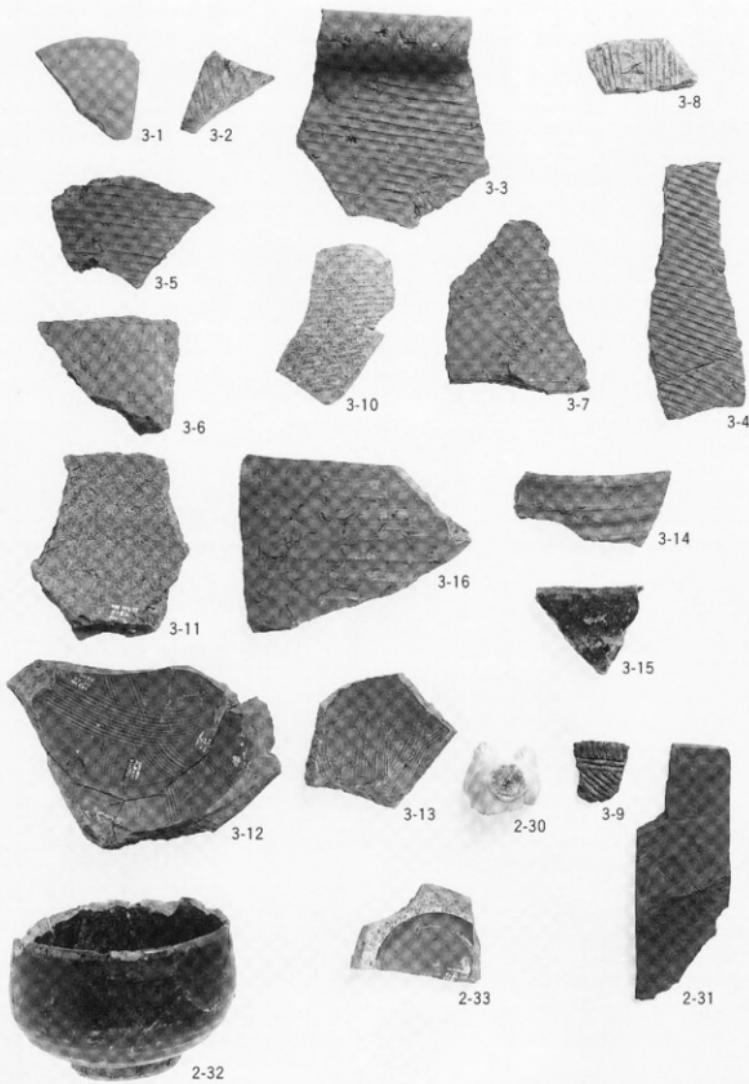


2-36



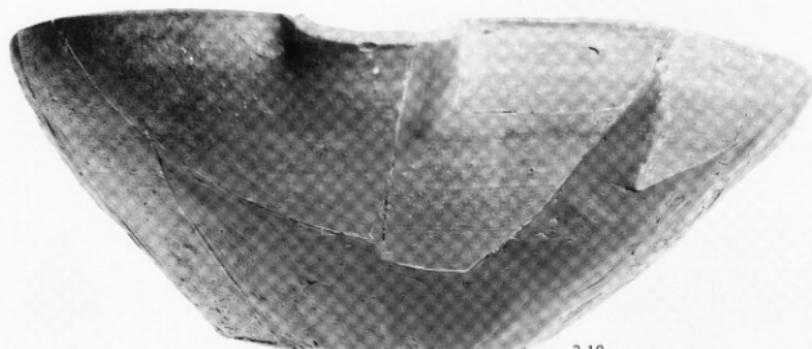
2-36

図版13 遺物写真（縮尺 2-39：1／2, 2-34～38・5-17・18・①：実大）
日枝神社裏遺跡：SK 1・平坦面 1・平坦面 3 出土（図版 2・3 参照）



図版14 遺物写真（縮尺1／2）

日枝神社裏遺跡：平坦面1・平坦面2・平坦面3・集石1・集石3・集石4・集石5出土、表採遺物（図版2・3参照）



3-19



3-20



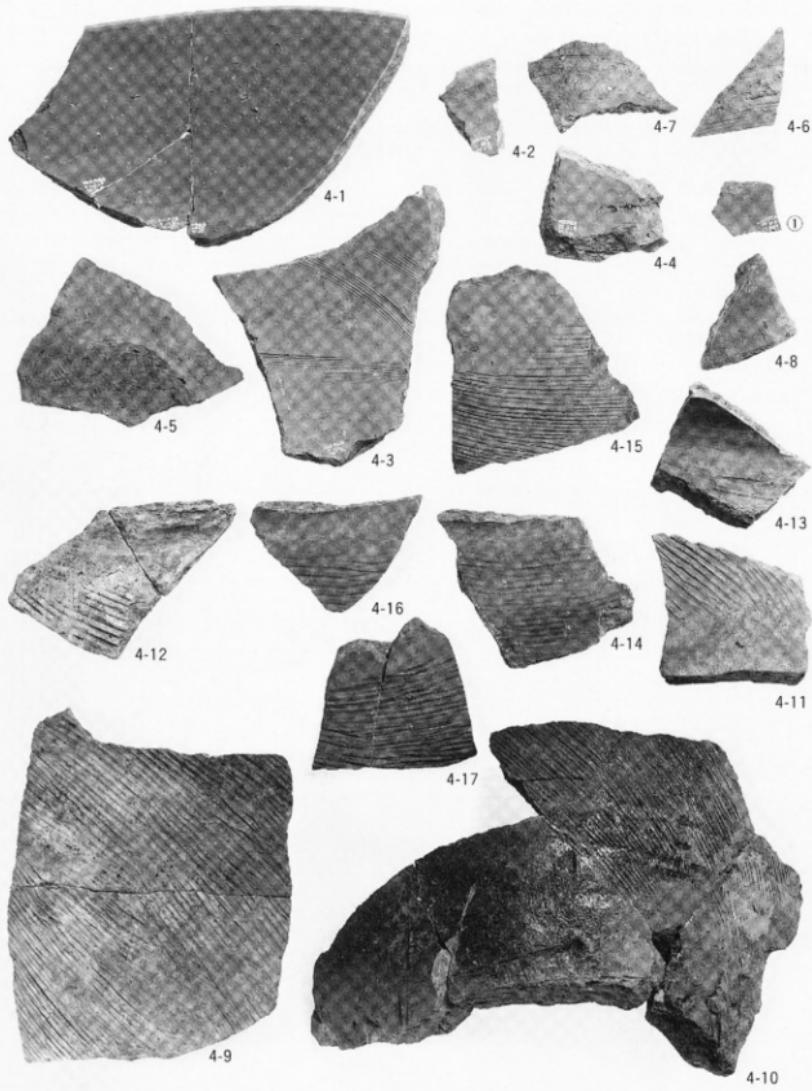
3-21



3-22

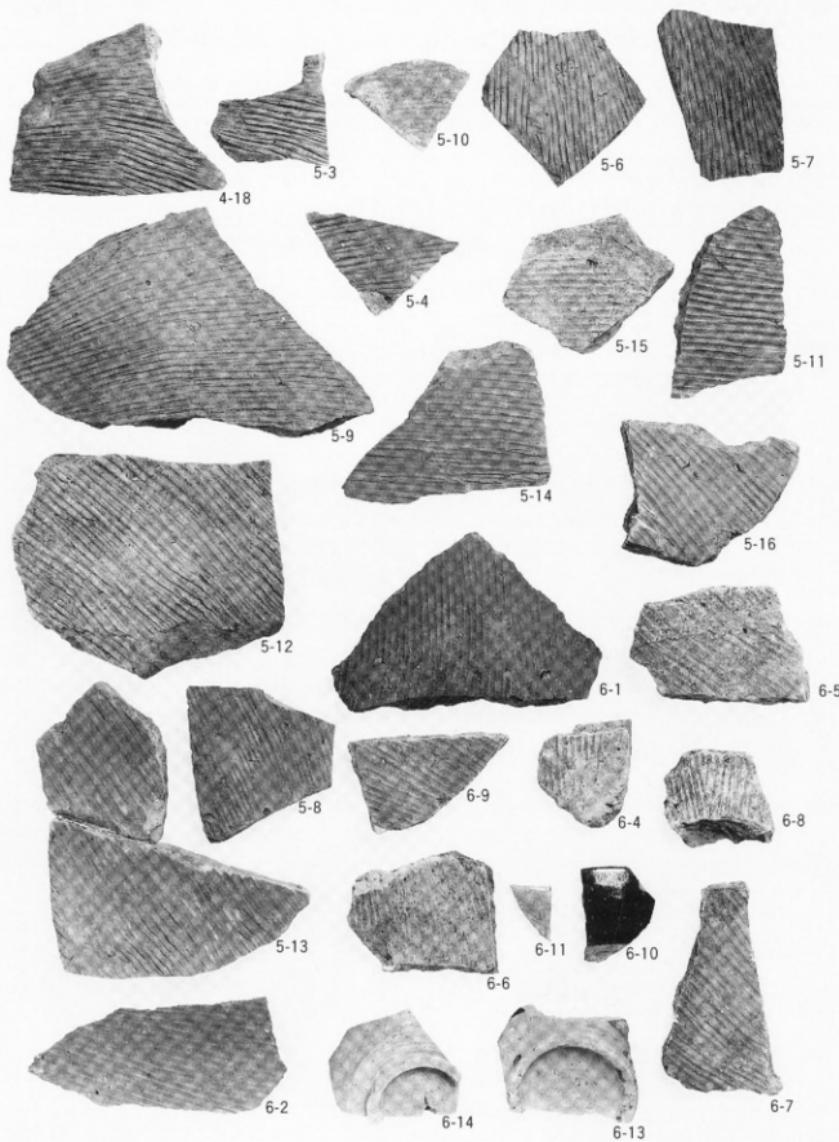


3-23



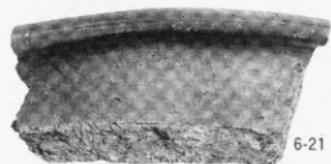
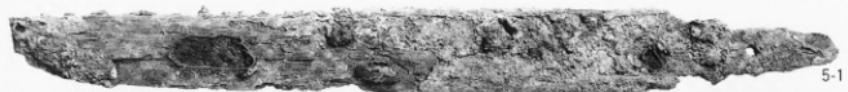
図版16 遺物写真（縮尺1／2）

円念寺山遺跡：集石13・集石16・集石20・集石21・集石24・集石27・集石29・集石30・平坦面1出土。（図版4参照）



图版17 遗物写真（縮尺1／2）

円念寺山遺跡：集石19・集石20・集石24・集石25・集石29・集石30・平坦面2出土。（図版4・5・6参照）



6-21



6-19



6-20



①



6-18



6-19



6-17

図版18 遺物写真（縮尺 5-1・5-2・6-18～6-21・①：1／2, 6-16・6-17：1／3）
円念寺山遺跡：集石2・集石8出土、平成11年度分布調査採集遺物（図版5・6参照）

報告書抄録

ふりがな	とやおけんなかにいかむぐんかみいちまらくかわうえやまこほんはづつらうさ だいめじょりきかのりほう ひえんじんじからいせき えんねんじやまいせき						
書名	富山県中新川郡上市町黒川上山古墓群発掘調査 第6次調査概報 日枝神社裏遺跡 円念寺山遺跡						
編著者名	上市町教育委員会						
編集機関	上市町教育委員会						
所在地	〒930-0393 富山県中新川郡上市町法音寺1番地						
発行年月日	2001年3月31日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所 在 地	コ 一 ド 市町村 遺跡番号	北緯	東經	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
ひえんじんじからいせき 日枝神社裏遺跡	ながにかわいんかみいちまらくかわうえやまこほんはづつらうさ 中新川郡上市町 黒川	016322	36度42分48秒	36度42墳41秒	20000612	1,500	遺跡整備 のための 資料収集
えんねんじやまいせき 円念寺山遺跡				137度24分16秒	137度24分20秒	20010331	
所収遺跡名	種 別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特 記 事 項		
日枝神社裏 遺跡	散布地	中世 近世	礎 石 集 石 土 壤 石 列	土 師 器 珠 洲 焼 越 中 蔵 戸	礎石・集石・土壤・石列を検出した。 大規模な開削・盛土により平坦面を造成していることを確認した。		
円念寺山遺跡	墳墓・経塚	中 世	集 石 石 棚 石 組	珠 洲 焼 短 刀 刀 子	平坦面・集石群・石棚・石組を検出した。		

富山県上市町
黒川上山古墓群発掘調査
第6次調査概報

発 行 日 平成13年3月

編集・発行 上市町教育委員会

印 刷 者 株式会社チューイツ